

眼科クリニックのバリアフリー ——診療所のバリアフリーと比較して——

診療情報管理士学科

【背景】

バリアフリーとは、障がいを持つ人々が障がいをもたない人々と同様な生活を行うときに、それを妨げるハード・ソフトの広範な障壁を除去するという意味である。この考え方は、1974年に国際連合が国際連合障がい者生活環境専門家会議報告書「Barrier Free Design」を発表したことで全世界に広まった。1981年が「国際障がい者年」と決められて以来、行われてきた様々な対策により日本全国でもバリアフリー化が急速に推進された。医療機関もその一つであり、多くの施設でバリアフリーが取り入れられているが、その内容は様々である。

一方、眼科クリニックにおいてはスロープ等が設置されていることを見学実習で実際に目にした。しかしそれに加え、健常者には分からないような細やかな工夫もされているのではないかと推察した。

そこで本研究では、肢体不自由な患者が多く来院するであろう整形外科診療所を比較対象とし、眼科クリニックにおけるバリアフリー環境との差異を明らかにすることによって、より良い施設作りを行う際の一資料とすることを目的とした。

【対象および方法】

本研究では、多肢選択法による質問紙調査を実施した。調査対象は、大阪市内の鉄道駅から徒歩圏の整形外科を標榜する診療所5軒と眼科クリニック5軒の合計10軒である。「徒歩圏」は、一般的な徒歩圏である半径800mを採用した。

また、調査項目は、①バリアフリー設備等の有無（ハード面）、②患者対応時における注意点（ソフト面）、③患者対応におけるセミナー等の開催・参加の有無の3項目である。

【結果と考察】

ハード面・ソフト面ともに、回答数の多かった上位3つを図にまとめた。（図1参照）

ハード面では、「スロープ」や「手すり」の設置や「車椅子での受診」が多かった。誘導ブロックは、歩行困難者や高齢者が躓きやすいという点で設置していない病院が多くあった。

ソフト面は共に「補助」が重要視されていた。バリアフリーと言われれば、手すりやスロープ等のハード面を想像しがちだが、ソフト面における人為的な支援

を行うことで、より質の高いバリアフリーを提供することが可能になると考えた。

セミナー等の開催・参加は、10軒中8軒の病院が有りと回答し、双方共に新人研修等での接遇セミナーが多く挙げられた。特に眼科では、ロービジョンケア等の専門性のあるセミナーが大多数の対象診療所で開催・参加されていることが明らかになったが、小数の対象診療所では行われていなかった。その為、各医療機関によって、ソフト面における患者対応やそれらに関連する知識に差異が生まれるのではないかと推察される。

ハード面	A	B	計	ソフト面	A	B	計
③手すり	4	5	9	①補助	4	5	9
①スロープ	5	3	8	②声掛け	2	4	6
⑦車椅子での受診	4	4	8	③分かりやすい説明	3	3	6

図1. 質問紙調査の結果 (A: 整形外科 B: 眼科)

【まとめ】

本研究では、整形外科診療所と眼科クリニックを比較し、バリアフリー環境の差異を明らかにすることによって、より良い施設作りを行う際の一資料とすることを目的とした。

今回の調査では、ハード面よりもソフト面を重要視されていることが明らかになった。職種に関わらず職員全員が各個人毎に意識的に気を配り、行動することが重要である。しかし、患者に関する情報や専門知識を各医療機関全体で共有しておくべきである。その為にはセミナー等の開催・参加を積極的に行い、また地域全体で情報の収集・交換を行う必要があるのではないかと考える。

【文献】

- 1) 秋山哲男, 池田誠・他: バリアフリーの生活環境論 第三版. 医歯薬出版株式会社. 東京, 2004.
- 2) 岡部正隆・伊藤啓: 色覚の多様性と色覚バリアフリーなプレゼンテーション. 細胞工学 21.8 (8), 2002.
- 3) 内閣府: 平成 26 年版 障害者白書 (internet) : <http://www8.cao.go.jp/shougai/whitpaper/h26hakusho/zenbun/index-pdf.html>